

# 修士論文研究ノート 張居正による『孟子』理解とその思想について

著者	佐藤 麻衣
雑誌名	筑波哲学
号	21
ページ	38-41
発行年	2013-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00121540">http://hdl.handle.net/2241/00121540</a>

【修士論文研究ノート】

## 張居正による『孟子』理解とその思想について

佐藤 麻衣

序

一章. 張居正の哲学とその背景にあるもの

一節：「朱子の影響と張居正当時の社会思潮」 滕文公章句上一章

二節：「性善の実証と実現可能性」 滕文公章句上一章

二章. 『孟子』「誠と性善」における張居正の理解

一節：「『天地生々の理』と『人に忍びざるの心』」 公孫丑章句上六章

二節：「『性善』と『情善』」 告子章句上六章

三節：「天人合一の根拠」 離婁章句上十二章

四節：「張居正における『大人』」 離婁章句下六章・離婁章句下十二章

五節：「幾希の理」 離婁章句下十九章

六節：「『理』という統一点」 尽心章句上四章

七節：「性善に疑う余地無し」 尽心章句下二十五章

三章. 張居正が目指す大明帝国の理念

一節：「君子の性とする所」 尽心章句上二十一章

二節：「人君がわきまえるべきこと」 離婁章句上十六章・離婁章句上二十二章

三節：「心の公私」 離婁章句下十六章

四節：「国君の賢人に対する態度」 尽心章句上三十七章・告子章句上十六章・告子章句下五章

五節：「君子の孝」 離婁章句上十九章

結

本研究の目的は、中国明王朝の後半の政治家であり、万暦元年（一五七三）に内閣の首輔（首席大学士）となった張居正（一五二五～一五八二）の著である『四書直解』における『孟子直解』をもとに、張居正自身の思想や理念を考察することである。万暦帝（一五六三～一六二〇）に進講する際の教科書とされた『四書直解』の内容は、主に朱子『四書章句集注』の解説ではあるが、朱子の説に依拠しつつも自身の考えが挿入されている点が見受けられる。しかし先行研究では、彼の政治的業績とそこにある政策理念の考察が主であり、彼自身の思想についての探究というものは少ない。また、その思想を窺う資料として扱われるものも張居正の文集『張太岳集』が多いことから、『四書直解』を主な資料とする研究は、張居正自身の思想を新たに実証できるものとする。

さらに、宋学が張居正の思想にどのように反映され、またその影響のもとでどのように独自の思想を展開しているのかという点を明確にする必要があると言える。

以上を前提として、孟子の性善説を中心に『孟子直解』を読解していき、『四書大全』とも照合することによって、朱子の注に関する宋～元代の儒者の説と対比しながら、張居正自身の思想について究明していく。また、張居正『四書直解』は幼帝万暦へ進講するための教科書であったこと、後に首輔となり、政治改革を推進したことを考慮しても、張居正の解釈の中に、現実に即したものが反映されるであろうことは想定できる。

そこで、本論文の構成として、まず第一章で張居正の考えに関連する社会思潮を概観し、次に第二章で孟子の思想的要素である性善説を中心に考察し、最後に第三章で張居正当時の現実に即した解釈を観た。

まず当時の社会思潮を鑑みると、張居正における明朝は朱子学を正当とする立場であるから、朱子学を批判し、自己の説を真の聖学であると主張した王陽明（一四七二～一五二九）の学説は、異端邪説として退けられていた。張居正が行った「講学の弾圧」「書院の廃止」の背景には、朱子学一尊の思想統制が目的としてあったのである。このため、特に程朱の「理学」を批判する陽明学派の弾圧へとつながっていく。

孟子に関して観れば、言を以って、楊朱・墨翟の邪説を排撃するものは、すべて「聖人の徒」であると孟子は断言する。即ち、張居正による「講学の弾圧」「書院の

廃止」は、「聖人の徒」として当然の行為であることを孟子に保証されていたようなものだったのである。

次に「性善」について観ると、張居正は、「情」の感応や「動」の発現は皆「人心の正」であり、和平であって乖離が無く、順調であって勉強不要であり、ただ「善」であって「悪」ではないという、朱子以上の強調を示している。

ここでの興味深い特徴は、「情」から仁の端である「惻隱の心」へつなげるといふ、「情」に対する肯定的態度が見受けられたことである。張居正は、朱子に比べると「情」の中にある「善」への意識の方が強く、「是の性有れば、則ち是の情有り」というように、「情」に対する肯定的認識が「性」と同等とも取れる論述をしている。そして、「情」が善である以上、「性」はそもそも善であり、「性」が「至善」であることの根拠であるとする。この「情は善」だと断言する背景には、張居正当時の陽明学派が「物欲」の肯定をしていることにも関係していると思われる。

道理に昏く愚かで、乱暴で道理に反し「不善」をするような人間がいたとしても、「性情」という天から受けた生まれつきの異なりや、「才質」という性格や才能の偏りの罪ではない。「物欲」の患いが良心を陥れ、「人心の私」がその「真性」を戕賊し、「性善」であるにもかかわらず不善に帰着してしまうのである。つまり、対外的な物欲と、内的な私欲が、「悪」の元凶ということになる。

さらに、「才の善を知れば、則ち情の善を知る、情の善を知れば、則ち性の善を知る」という一連にして明快な説明を試みている。

張居正によれば、四徳は天性であり、それは固有の「理」であり、この理が発現して「才」となるのだという。

ここで、「理」の発現が「才」だということであれば、孟子の説にそのまま依っていると考えられる。つまり、才—情—性のつながりを「善」によって証明する必要がある張居正は、「性」が「至善」である論拠として、天理の発現である「情」は「善」であり、「情」が「善」である証明として、天理の発現である「才」は「善」だということになる。『孟子』告子章句上六章を観ると、孟子における「情」は「性」の自然に現われたもの、「才」は人に性として備わるその「素質」であり、「才」と「性」はほとんど同義であるから、張居正は孟子の考えにより近づいた解釈を試みていると言えるだろう。

確かに、「情」を「善」とする場合に「四端」に限定して考察している点を考慮すれば、張居正が完全に「情即善」だとしているとは断定できないが、このように「才」すらも「善」だと言っている点は非常に大きい。

最後に、張居正は「而して其の大道の公を為すの志、将に必ず天地を範囲し、万物を曲成し、而して後に其の心始めて快しとするなり」と述べ、彼が目指したであろう大明帝国の理念を提示している。一般的な君子が喜ぶ「広土衆民」などは既に楽しむ所に非ず、性を尽くし「大道の公」を為す志こそが、万物をことごとく完成させる、君子の真の楽しみであるという論述は、張居正独自のものである。さらに張居正は、君子とは、天下を安んじ、多くの人民を康んじ済うことを志とする者なのだと主張する。

張居正によれば、「君子の性とする所」とは「理」だということになる。「理」である「性」を尽くし楽しめば、天下の外にまで超出し、宇宙にまでつながる。張居正は、万暦帝に対して所謂「天下」を超えた宇宙にまで意識を拡大し、超人的な存在として君子たるべきことを要求しているように思われる。張居正にとって、一般の人が執着する「天下」とは所詮は土地や人民、或はその大小に過ぎないものであり、宇宙とつながる「君子の性とする所」の楽しみには遠く及ばないものであるとしている特徴がある。

また、天から賦与される「性」を敢えて「君子の性」と示し、「君子」に対する特別意識を表わしている。つまり目指すべきは定命たる「君子の性」であり、定理として「万善」だと保障しているのである。張居正にとっての「究極の善」とは、この「君子の性」を得ることで明らかとなる「定理」だと言うことができる。

以上、今回の考察に於いて明らかとなったことを部分的に示したが、張居正による『孟子』理解の特徴として、やはり朱子の解釈を踏まえつつも、彼自身の現実に即しながら敷衍して論じている点が見受けられた。

(さとう・まい 筑波大学大学院人文社会科学研究所在学)